Sinéad Morrisseyの詩における天候

虎岩　直子

はじめに

シンポジア第４部門「アイルランド島の現代詩――新しい天候を告げる詩人たち」の第 ３登壇者として、北アイルランド詩人 Sinéad Morrissey (1972-)を取り上げ、初期の詩から次第に変化していく天候を含む自然現象を表象する語句を分析した。

１.比喩としての天気、水、大気による予報

Sinéad Morrisseyは初期から、社会政治的な状況の比喩として天気や自然現象を頻繁に使いる。1996年出版の最初期の作品、第1詩集 *There was a Fire in Vancouver* 中の'Belfast Storm' は the Troubles 「紛争」で荒れた北アイルランドの首都 Belfastの状況を文字通り雨風吹き荒れる天気で比喩しているし、第２詩集 *Between Here and There*（2002）の巻頭詩 'In Belfast'でも川は 'the river is shimmering at low tide and sheeted with silt.' と、和平協定締結後の政治的状況を比喩して停滞している。ショッピング街は 'weather-mangled' (「天気で台無しにされ」) 、街全体、'in its downpour and its vapour' と雨と水蒸気に閉じ込められ先が見通せない。Belfastを流れ海に注ぐ Lagan 川が Morrisseyの詩の中で動き出すのは、1998 年の「聖金曜日の合意」から 10 年あまり経過して政治状況が安定してくる時期に出版された第４詩集 *Through the Square Window*（2009, これ以降 *TSW*） あたりからだ。'Cycling at the Sea Level' (*TSW*)の中ではラーガン川の流れに沿って自転車を漕ぎ我が家へと向かって行く語り手が、変化する周りの風景を報告する。ここで川は澱んでも閉じてもいない。 'the river opens, one artery to another, to multiplying water./ How many possibilities in a deck of cards?(*TSW*)とあるように、生命をもつ街という肉体を動かす動脈に比喩され、「多層化していく」（ 'multiplying'）や「いったい幾つの可能性が１組のカードにはあるだろうか」('How many possibilities in a deck of cards?)という語句はベルファスト、北アイルランドの、さまざまな可能性を秘めた明るい未来の予想と期待を暗示する。

'In Belfast'で停滞していた川、さまざまな支流の水と混ざり合いがなら流れていく 'Cycling . . .'のその川は、詩のなかの実際の風景を構成するものでありながら、その時々の北アイルランドの社会の状況、 social climate の比喩にもなっている。これらの詩での「社会状況予報」は、天気や川の水の状態の比喩の形で告げられている。

2. 比喩ではない天気—比喩という人間のレトリックからズレていく。

社会状況の比喩あるいは見るものの心象風景として機能するというより、天候や大気、水の変体そのものが焦点となっている作品が Morrisseyにおいて目につくようになってくるのは、稀に見る異常気象による災害の 10 年であったと世界気象機構が発表している 2000 年から 2010 年の時期からで、*TSW* には、 'Ice'のようにカナダを襲った大寒波という自然現象を、比喩としてではなく描く作品も登場する。

さらに、比喩あるいは類似関係がコンヴェンションとはズレている気配がある作品が出てくる。やはり第４詩集中の 'York'を例として読んでみる。この詩はキリスト教物語の誰もが知るエピソードを連ねた神秘劇 York Cycleを借用、というより、Morrissey自身巻末注で'found poem' としているものだ。13のカプレットが構成しているこの詩の第11カプレットの２行目('And episodes in between with a yet more fabulous cohabiting')と第13番目のカプレット(Because even a singing gash in the stratosphere is redeemable, *the Fall of Man :/* To the repairers of barrels, buckets, and tubs.)はMorrissey自身による。Morrisseyは第10カプレットまで「見つけた語句(found phrases)」に寄り添い、第11番カプレットの1行目で「共生」「同棲」を意味する 'cohabit'という語を挿入することで、 'found poem'と Morrisseyによる 'York' という詩の共生関係を示唆するとともに、神秘劇の世界に「借用」を持ち込んで、「異化」してもみせている。第 13 番目のカプレット の'*The Fall of Man*'は York Cycle では 'the Coopers'の担当で、'York'の 'the repairers of barrels'(樽の修繕屋)とほぼ同義だ。Morrisseyは、 'Because'から 'The Fall of Man'まで及ぶ長い1行目とバランスをとるために、神秘劇で通常 用いられる古い語 'cooper'の代わりに 'the repairers of barrels, buckets, and tubs'という長い言い回しを使ったのだろう。何れにしても、水漏れを修繕する職人が、ヘビの奸計に乗って楽園から追放され落ちていく人間の挿話を担当する。樽屋ギルドは壊れた樽を直しきれないから堕落を担当するのだとしたらなかなかの皮肉だし、酒など大切な液状のものを保存する樽を見事に作ったり修繕したりするギルドに「人間堕落」を修繕する可能性を、真面目に託しているのかもしれない。そこにMorrisseyは「成層圏の裂け目だって繕えるのだから」と加えて、「人間堕落」の修正と 21 世紀の大問題である地球温暖化を引き起こす成層圏オゾン層破壊の修復の可能性を連結する。 'stratosphere'(成層圏)という語は、1908年にフランスの気候学者 Leon- Philippe Teisserenc de Bortによってラテン語の「広がっていく」(sternere)から造られた、使われ始めて100年ほどの新しい語だ。その語を中世の神秘劇と 'cohabit'(共存)させるというアナクロニズムを Morrisseyは冒しながら、21 世紀の

地球、いや宇宙規模の人間による害悪は「修復可能」という楽観的、あるいは祈念を含む倫理的メッセージ、「新しい天候の予測」をこの詩は示唆していると言えるかも知れない。その「修復」を可能にする鍵は「共生」。'York'は方法として 'found poem'という「借用」を使い、「共生」がもたらす新しいものの誕生、ここでは人間と自然が共生することを考えることによって成層圏 が修復される可能性、を示唆しているとも読める。

さて比喩的関係。ここで、自然の一部をなす成層圏の状況は人間の内的意識や社会状況を象徴しているわけではない。成層圏自体に問題が生じているわけで、神秘劇のテキストにこの状況を嵌め込むことによって、聖書的「人間の堕落」の一例が「成層圏のさけめ」に見えてくる可能性があるが、比喩関係ではない。

寓意が強い神秘劇という文脈を使って、比喩、例え、特定の関連を成り立たせる文化に基づいた意味づけに、新たな事象を当てはめて読者に状況を類推的に理解させる、という効果とともに、逆に、どこかズレている状況を見せることによって、特定の文化コンテクストに基づく視線からはみ出している世界を予想させているということもできるだろう。

もう一編、天候が比喩の外側にあることが暗示されている詩を見てみよう。

2017 年に出版された第 6 詩集 *On Balance* で詩人は多くの均衡を欠いて不安定になっていく歴史的事件や状況を取り上げている。沈没する運命のタイタニック号、わずか数分地上を離れた世界初めての女性による飛行、極圏の氷がどんどん溶けていくなかかろうじて生き延びようとしているホッキョクグマなどだ。 そして彼女の詩作品はその状況に対する均衡の試み、詩というマシーンが世界の事物と共振を起こし、例え一瞬にしても均衡を世界に齎すのでは、という願っているのだ、とインタヴューで明かしている (*The Irish Times*, 21 October, 2017)。

詩集の終盤に収められた 'The Wheel of Death'はアイルランド随一、ヨーロッパ、世界的にも有名な Tom and Jamie Duffy サーカス団の The Wheel of Death 「死の大車輪」ショーを中心に据えている。詩の形は、回転する車輪を真似ていて、18 連からなるコンクリートポエムである。天気は雨、泥濘んだ地面にかろうじて張られたテントの中では、観客がショーを待ちかねているが、水族館のアンコウみたいに見える客席の子供たちも、次に登場する猛獣と同様、もうショーの一部のようだ。サーカスのテントの中には、北極オオカミや、アジアの果てから、ロシア、そしてウクライナ人（ここでは今回のショーには登場しない、という形で登場している）まで、地球上のいろいろな土地からの生き物が集まっている。ショーの最後にはあたかも死を賭しているかのように回転しているサーカスの一番の見せ物「死の大車輪」がいよいよ登場するが、この「大車輪」は生命と地球・宇宙が危うげなバランスをとって持続し続けていることの象徴だろう。

詩の第３連目か４連目にかけて 'The Sea/ could not unswitch/ the lever/ of its own bad-weather-/ generating mechanism even if/ we begged it to.' と人間の調整が及ばない悪天候が告げられ、最終第 18 連で 13 週間降り続いいて止まないと語り手は語り、詩の初めと終わりに登場してこの詩の中心にある「死の大車輪」の背景にある雨は、サーカスが象徴している人間的営み及び生命体の絶妙なバランス -- サーカスという人工的な仕掛がとるバランスも含みながら -- を、物理的に崩す可能性をもたらす異常気象そのものだ。水族館のアンコウのように水面下に漂うことになってしまうような人間の危うい、あるいは、破壊的な、あるいは停滞した、社会や人間の心情を比喩するために登場しているわけではない（人間の行為の結果ではある）。雨は人間的バランス行為の外側にあり、人間が関与しているメカニズムを崩す可能性がある、その状況を気付かせることに、Morrissey の「新しい天候の告げ方」がある。

3. ジャーナルとして伝える。

最後に Morrissey の語り手の位置を確認する。本シンポジウムでは天気関連の語句による予報あるいは警告に注目した。Morrissey は、気候変動だけでなく、すでに天気比喩で取り上げた紛争、戦争、さらに女性問題、社会の中の暴力、など、社会・世界・宇宙が抱えるさまざまな troubles, problems をしばしばテーマとする。しかし語り手は troubles の中心にいて困難を経験している当事者というよりは、spectator あるいは audience の位置を取る。取り上げる紙面はないがシンポジウムで最後に紹介した'Whitelessness'は、極点の氷が解けて至る所黒い地肌が見えている状況を伝えるドキュメンタリー作品に登場する 6 人の観察者の声を、テレビで見ている詩人が借用した作品である。Morrissey は、日常の中にあるメディアを通して（テレビやラジオによるドラマや歌やドキュメンタリーなど）、あるいはサーカスの芸人ではなく観客として眺めるという立場を通して、中心的事件を詩として読者に届ける。さらに、Morrissey は「借用」もとやテーマとするテレビ番組や記事に出会った状況を Notes やさまざまなインタヴューで明らかにするが、それによってジャーナル性と多視点性が加わることになる。Morrissey の詩は悲嘆にくれず、咎めず、苦しみを主張せず、愉快になりすぎず、「姿を隠してはいない控えめな証人」として見て証言することに努め、新しい天候を伝えてくる。

引用文献

Sinéad Morrissey, *On Balance*, Carcanet, 2017.

Sinéad Morrissey, *Found Architecture,* Carcanet, 2020.